
エクソシストの資格

鳴茂たから

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エクソシストの資格

【Zコード】

N1807X

【作者名】

鳴茂たから

【あらすじ】

エクソシスト バチカンが本格的に悪魔退治をする為の戦闘員 を育成するための組織、聖・国立十字学園に入学した少年が、ひょんなことから特別夜間科に通うことになり、ひょんなことから魔王サタンと対決しなければならなくなり、ひょんなことから世界の命運を託されてしまうというお話。シリアルではないがコメディとも違うような……そんなお話。

Scene - 1 邪魔魔

祓魔師 通称エクソシスト。

それが職業として認められるようになつたのは、今はもう昔のことである。

認められると言つても、世間一般には公開されていない。世界各国のトップしか知らない最重要機密である。

エクソシストとは、主に“悪魔”を退治する人間を指す。いや、それらを退治する人間たちが自らエクソシストを名乗つたのだ。もともと悪魔の存在が否定され続けていた世の中で、エクソシストたちは教会の司祭などをして祓魔の仕事をしていた。しかしそれだけでは世の中の悪魔を完全には祓えず、力を増した悪魔たちは更に人間に危害を加えるようになった。

だからこそバチカンがエクソシストを世界に派遣する形で悪魔祓いをするようになったのだ。

悪魔が見える人間はほんの一握りだし、祓魔の力を使えるのは更に限られた人数しかいない。

だからこそバチカンは世界各國に祓魔協会の支部を置き、才ある人間にそのための教育を施すのである。

世界の明日を願つて。

* * * *

祓魔協会日本支部。もつともそれは世間に隠されたものだから、正式名称は聖・国立十字学園^{クロス}。それは一般市民が通う普通科と、エクソシストを育成するための特別夜間科が存在する国立学校だった。特別夜間科はエクソシストとして世界を守る任を負い、それに敬意を表し“夜”とかけて騎士^{ナイト}クラスと呼ばれる。一般生徒にはその存

在は隠されていて、ある選ばれた生徒だけがその教室の扉を開くことができる。

* * * *

「さて、どうするべきだらうか」

桜もちょうど満開になり、それと同時に新しい学校生活への期待も膨らむ4月某日。時刻は10時を過ぎたころだらうか。ある少年が一人、聖・国立十字学園 俗稱は十字学園 のしつかりと閉じられた正門の前に佇んでいた。

その身を包むのは、細かい装飾に凝つた十字学園の制服であり、そのネクタイが青いことから一年生であると分かる。つまりは本日、入学式が行われている十字学園の新入生である。

少年がここにいるのには、深い理由がある訳無かつた。ただ単に寝坊したのだ。入学式の集合時間は9時。開式は10時。この少年は「入学式当日も寝坊した遅刻魔」のレッテルを貼られることになるのだ。

本当だつたらそれは避けたかつた。遅刻なんか当たり前、授業をサボることなんかしようだつた中学時代とはけじめをつけるつもりだつたのだ。

「……さて、どうするべきなのだらうか」

少年は再度呟いた。

しかしそれに答える者もなく、ただ満開の桜の花びらが少年の視界を横切つていくだけだつた。

途方に暮れた少年は、風に踊らされる黒髪を抑えて、空を見上げてみた。相変わらず良い天気だつた。

「ニヤー」

空を見上げていた少年の耳に、猫のよつな鳴き声が聞こえてきた。いや、それはまさしく猫の鳴き声だつた。

その黒猫は、金色に輝く瞳でじっと少年を見つめていたが、不意にそっぽを向いて歩きだした。そしてしばらく歩いた後、一度少年を振り返りまた「ニャー」と鳴いたのだ。

「付いて来い、ってことか？」

少年は怪しげながらも、その猫に付いて行くことにした。どうせ門の前で待っていても埒があかないと薄々気づいていたからである。

* * * *

「ほひ。あの少年、リンに気付きましたね」

学園の最上階の窓から外を眺めている男がそう呟いた。その声はどこか艶っぽく、その瞳は細められ、新しい玩具を見つけた子供の様に輝いていた。

グレーのスーツを身に纏つた男は、その腕に一匹の白猫を抱いていた。その猫が窓の外に見える少年を見つめながら「ニヤア」と鳴き尻尾を揺らした。

「そうですか、ラン。あなたも気になりますか、あの少年が」

男はランと呼んだ白猫に向かって話した。

「彼の名は、何と言つのでしょうかねえ」

男は白猫を撫でながら、また窓の外に視線を戻した。しかしそこにさつきの少年の姿は無く、どこまでも広がる水色の空と、その中をゆらゆらと漂う桜の花びらが見えるだけだった。

* * * *

少年が辿り着いたのは、学校の裏門と思しきものの前だった。もちろんそれはしっかりと閉じられている。

「ほひちも駄目、か。ここまで連れてきてくれてありがとう」

案内してくれた黒猫を見て、一応お礼の言葉を述べた。無論相手

は猫だし、助けられた訳でもないがふと口にしていた。

「どういたしまして」

少年は目を瞠った。その場には少年と黒猫。それ以外の存在はなく、だからこそその声の主がどこにいるか周囲に視線を巡らせた。しかし周りには人のいる気配がしなかつた。少年は空耳を疑うが、黒猫に恐る恐る視線を戻した。

黒猫は少年をじっと見つめて大人しく座っていた。

「今喋つたのは、君か？」

自分でも馬鹿らしいと思った。猫が喋るなど聞いたことがない。しかし予想に反して黒猫は話しかけてきた。少年の思考の中に。

「あら、あたしの声が聞こえるの？」

その時ざあっ、と一際強い風が吹き、桜の花びらが少年の視界を埋め尽くす位に空を舞つた。

Scene - 2 生徒会長

信じられないことが、でも実際に起こってしまった。

そんな時、人間はどう反応するべきだろうか。驚愕に目を見開いてみる？笑い飛ばしてみる？頑なに信じない？

しかしこの少年はそのどれでもなく、淡々と物事を認めてしまった。

「喋る猫って実在するのか

少年は田の前にちよこんと座る黒猫をまじまじと見つめてそう呟いた。

「やあね。あたしを普通の猫と一緒にしないでよ。あたしは」「どうも、新入生の方？」

黒猫の声と共に少年の耳に届いたのは、とても凜とした少女の声だった。

少年が声の聞こえた方を振り向くと、そこには声に似合つほど可愛らしく凜々しい少女が立っていた。

「えと、はい。新入生です」

少年は尋ねられた問いに答えた。ひどく頼りなげな考え方だったが、仕方がない。緊張がピークに達していたのだから。

声をかけた少女を、少年は知っていた。

彼女は十字学園の現生徒会長、西田美樹である。
生徒はもちろん、校外の人間にも知られている彼女は、かの有名な西田財閥のご令嬢だ。

「その猫……。貴方、お名前は？」

西田が、未だ大人しく座っている黒猫を見た後に少年を見つめてそう言った。

その瞳は魅惑的ではあったが、その視線はさも少年を見定めるよ

うに体の隅々まで眺められたような感じで気分は良くない。

「一条、貴志です」

少年はその居心地の悪さから、少し声を上ずらせたが名乗った。

「一条……」

西田はその名に何か思いがあるのだろうか。そう呟いた後、少年から視線を外し何か考え込んだ。

少年 一條貴志は西田が何かモーションを見せるまで、微動だにしなかった。それほど身体が強張っていた。

「一条君。入学式は既に終わりましたよ」

西田は視線を貴志に戻し、そんな今更な事を言った。しかし貴志は素直に反応した。

「えつ、本氣ですか！？」

今まで意識の隅に追いやられていたが、今日は十字学園の入学式であり貴志はその新入生だった。

貴志が教えられた事実にあたふたとしていると、西田はふう、とため息を吐きながら貴志に近づいてきた。

「本当だったら今頃、クラス分けが発表されてそれそれでH.Rのはずなのだけれど、貴方が居ないと言つことで生徒会が学園中を探していたのよ。変な所に迷い込まれていたら大変だし」

吐き捨てるような西田の言い方に、貴志の罪悪感は否めなかつた。

「まあ、そのおかげで良い新人を見つけられたのはラッキーだったわ」

西田はぐるりと振り返り歩き出した。貴志は黙つてそれに付いて行つた。その後ろには、さつきの黒猫が付いて来ていた。

* * * *

西田の足は、通常の校舎とは別の所に向かつていた。これでは全くもつて反対方向だ。

しかし一度も言葉を発さない西田に対し、何かを尋ねるのに少

し抵抗があった。

仕方なく貴志は黙つて西田の後を追い、どんどん校舎から離れていった。

「一条君、一つお尋ねします。貴方はあの一条更紗と関係がありますか？」

西田が前を向いて歩きながら、貴志にしきりに尋ねた。

一条更紗。

その名が他人の口から出るとは、夢にも思つていなかつた。

貴志は一瞬たじろぐが、拳をギュッと握り答えた。

「はい。母の名です」

つかつかと歩いていた西田が足を止め、貴志を振り返つた。

その瞳はどこか虚ろげで、その感情を読み取れない程無表情だつた。

「そう、お母様だったの。……残念だったわね」「ね

残念だったわね。

西田が何故そう言つたのか、いや、何故そう言えたのか分からなかつた。

確かに母は他界している。

だが西田がそれを知つてるのは何故だらうか。

そう尋ねようとした貴志が口を開きかけた瞬間、西田はまた前を向いて歩き出した。

出ばなを挫かれた貴志は、結局聞けずじまいに西田に付いて行つた。

* * *

「ここが今日から貴方に使つてもいい校舎よ。ちなみに寮はこの先にあるわ」

西田から紹介された建物は、先程通り過ぎた校舎とは違つ雰囲気だつた。

どこか高級感のあるその建物は、古雅うだがしかつりしているよう見える。

「えっと、俺のクラスがここに?」

先程からずっと黙っていた貴志だが、周りの景色の雰囲気が変わってきたところから不安ではあった。

そこは到底勉強をする為の場所とは思えなかつた。

他の生徒には気付かれないような学園の敷地内の端にあり、周りは木々に囲まれている。まるで外界から隔離されているような、そんな感覚に陥る。

「ええ。本當でしたら普通科の方に行つて頂く筈だったのですけれど、ケット・シーを連れている所を見てはそもそも言つてられませんから」

西田は少し微笑みながらそう言つた。むつきの無表情は恐怖を誘つたが、今は逆に安心感を与える表情だ。

しかし貴志は彼女の言葉の殆どが理解出来なかつた。

「…」の学校つて、普通科しか無かつたですよね?しかも全寮制とかじやないし。それにケット・シーつて?」「

「それは

「

西田が説明の為に口を開いた時、しかし他の声でそれが邪魔された。

「ドウモー、生徒会長さん。おや、その子は……」

妙にゆるいその声は、頭上の方から降つてきた。

その男は、目の前の洋館のよつな校舎の一階から顔を出していた。すごく美形な男だつた。

Scene - 3 一条家

この状況下で、貴志はしかし何となく冷静でいられた。

「一条君？ 聞いていましたか？」

西田がじつと貴志を見つめて尋ねた。

その視線には何か物を言わせぬ威圧感があるよう感じたが、貴志は少ない勇気を振り絞って言った。

「大体は、把握したと思い、ます……？」

最後に疑問符が付いてしまったのは、まだその内容を信じていなからだ。

だが西田は田字とくその疑問符を指摘した。

「まだ、理解出来ていらないようですね。まあ、初日から遅刻してくるような人がすぐに理解できるとも思っていませんでしたが」

西田は見た目こそぐわづ皮肉屋だ。

言葉の節々に嫌味を感じるし、何より人を見下すような言い回しを使う。

「まーまー、会長さん。どんな人でも、理解に時間がかかるものでしょでしょ」

そう言いながら西田をいためているのは、さつき校舎から声をかけてきた男、笹川達矢だった。落ち着いた雰囲気とは違い、性格はとても明るくはきはきとしている。

彼は教師らしいが、見た目がとても整っていてとても先生とは思えない。むしろどこぞのモデルさんですか、と尋ねてしまいそうなくらいだった。

「まったく、この冴えない少年があの一条更紗の息子だなんて……」

まだ。また西田からその名前が出てきた。

貴志だってそこまで馬鹿じゃない。いまいち理解していなくても、

さっきの話の内容は何となく把握している。それがどうこう意味だからも分かっているつもりだ。

だが、西田が貴志の母を知っているはずがない。

貴志の母は本当に平凡だった、と思つ。子供心に綺麗な容姿をしているとは思つたし、友達からも羨ましがられたことがある。しかし、それだけだ。

シングルマザーと言つ」とで、もちろん仕事はしていたが世間に顔を知られるようなものじゃなく、ただの会社員だった。

「あの、どうして母のことを知つてるんですか？」

貴志はおずおずと尋ねてみた。実は一番気になっていたことだ。その言葉に一人は一瞬驚きを見せたが、次の瞬間には笑い始めた。いた。

「君、さつさまでの話聞いてたんでしょう？ だつたら察しようよ、ね？」

「貴方、やっぱり話が分かつていないう�ね。一から説明した方がよろしいかしら？」

何やら馬鹿にされている貴志は、少しむくれて一人に抗議する。「エクソシストとかバチカンとかの話に母は関係ないでしょう！？」

貴志が少し語氣を荒げたその言葉を聞いて、水を打つたように二人の笑いが止まった。

その後に西田は、さも信じられないと言つように貴志に質問してきた。

「貴方、『自分のお母様の職業も』存じないの？」

「は？ 母は普通の会社員でしたけど？」

会社員、と言つ言葉を西田と笹川は反復し貴志に視線を向けてた。

「じゃあ、一條更紗がエクソシスト… それも歴代最強と謳われた狩人ハシだつたことも知らない？」

「知りません。初耳です」

貴志がそう答えると、一人はピシャアツ、と雷に打たれたように驚き、しばらくの間静止していた。

そうしてから10秒…20秒…

貴志の限界が訪れた。どうしてもこの沈黙に耐えられなかつた。

「えっと、あの……」

そんな貴志に構わず、一人は未だに静止している。

「だから、こんなに理解が遅かったのね……」

「そうだね。確かに僕もおかしいとは思つていたんだよ……」

一人が沈黙の中から発した言葉は、とても小さな声で、貴志には聞こえていなかつた。

* * * *

沈黙を破つた後は、 笹川に急かされながら教室へと向かつた。
西田は付いて来ることなく「それでは」と言つて校舎から出て行つた。

「えー、遅れてきた新入生の一条貴志君です」

笹川が貴志をクラスに紹介した。十人弱…クラスにしては少なぎ
る生徒数だったが、それ用に教室もこじんまりとしている。

笹川の言葉に先程の西田と 笹川同様の沈黙が広がつた。

「 一条……」

不意に誰かがそう呴いた。それを皮切りにクラスの人間が口々に、

「 一条つて…」

「 あの 一条家…」

「 まさか 一条更紗の…」

「 どことなく更紗様に…」

とざわめき始めた。もちろん貴志には理解しがたい状況だったが、

笹川はその反応を当然予想していたのだろう。

「はいはい、皆さん。えー、「」察しの通り彼は 一条更紗さんの息子
さんです」

笹川がそう言つと同時に、全員が貴志の方を向いた。

何か言葉を待ち望んでいるように。

「……えっと、ハイ。一條更紗の息子です」

その瞬間教室中がどよめきたつた。

貴志はその意味がいまいち掴めず、 笹川に近付いて小声で尋ねた。

「何でみんなざわざわしてるんですか？」

「そりゃあ、あの有名な一条更紗の息子だからね。みんな興奮するだろう？それに君は一条家の跡取りってことになるからね」 笹川がさも当然と言つたように答えたが、一条更紗が貴志にとつては母親以外の何物でもなく、ましてエクソシストだったなんて知らなかつたのだから実感がわかない。それどころか、

「跡取り？一条家って、え？どういうことですか？」

「まあ、詳しいことは後で説明するから。とりあえず席着いて」 そう促され、貴志は納得できないままで理解できないままで空いてる席へ座つた。

貴志が一步一歩進む所もじいと見られて、何だか少し変な気分だつた。

* * *

H.R.が終わり、貴志は 笹川に呼び出された。

他の生徒たちは少し残念そうに貴志を見送り、自分たちは下校の支度を始めていた。

「あの、もしかしなくても一条家つて相当なお家ですか？」
ソファに腰掛けながら、貴志は 笹川に尋ねた。

笹川に連れてこられた一室は職員室のようだが、他に人の姿は無く、何となく貴志は安堵した。

「んー、確かにやん」となき家柄だね。もっとも、特にやんかったのは一条更紗だけど

「やん」となきの意味がよく分からなかつたが、貴志は何となく理解した。

すごいんだろうな、と。

「それと、跡取りつて？」

「ああ、それはだつて、一條更紗の一人息子なら一條家の跡取りだろ？更紗さんも一條家の一人娘だし」

今まで知らなかつたことが次々に展開されていく中で、貴志が理解できたのは果たしてどれくらいだろうか。

答え。

全くもつて理解不能、だつた。

もちろん話を把握してはいる。内容は分かつてているのだが、それが真実かどうか未だ判別不能だつた。

「それに、そのケット・シーは一條家の使い魔だからね」

笹川に指差されて初めて、自分の横にいるその存在に気が付いた。朝出会つた、喋る黒猫だ。

しかし貴志にはいつからこの猫がいたのか分からなかつた。

校舎に着くまでは確かに後ろを歩いていた。しかし貴志が教室に着いた時には、いなかつたと思つ。だが今はここにいる。

全くもつて存在のつかめない猫だと思つた。

Scene・4 ケット・シー

「さて、朝の続きなんだけど……どうせ理解わかつてないよね。基礎知識は知っているとばかり思っていたから、多分説明不足になってると思ひ。一から話そつか」

笹川は低いテーブルを挟んで貴志の向かいにゆりくり腰掛けた。テーブルには先程、笹川が淹れてくれたお茶があった。

「お願ねがいします」

貴志はまだ熱いお茶に手を伸ばしつつ、やや真剣な面持ちで言つた。

「じゃあ、まずはエクソシストについて。つていうと悪魔のことから話さなきやだね。悪魔つていうのは世間一般に言つ悪魔と、多分同じだと思って良い。映画とか小説にもよく出てくるような、所謂化け物だよ」

笹川が睨むように一瞬目を細めた。

化け物だよ。

その言葉が、やけに頭の中に残つて反響する。

「エクソシストはそれを祓つたり、狩つたりするのが仕事。一応、国から給料は出るんだよ。微々たるものだけどね。本当に日本つてケチだよねー」

笹川は先程の険しい顔が嘘みたいに、笑顔で「冗談を言つてみたりする。

貴志はその表情に少し安心しながら、一つの疑問点を挙げた。

「悪魔を祓うのと、狩るのは違うことなんですか？」

「基本的には一緒だ。ただその方法が違つて、聖書や魔導書の詠唱か、物理的攻撃か。ちなみに前者を使うエクソシストの方が多いね、圧倒的に。まあ、その理由はそのうち授業でやると思つよ」

授業。

そんなことを学ぶ授業なんて、受ける予定など無かつたのだが。

「授業…えっと、十字学園はそんなことも教えるんですか？」

笹川は苦笑して、優しい言葉づかいで教えてくれた。

「この、夜間科ではね。普通科ではそんなことしないよ。それに、

そんなこと言つても信じない人が殆どだしね」

貴志が實際にはあまり信じていないことに、笹川は気付いているのだろうか。

普通の人間ならば、いきなりこんな話されても信じ難い。

「いやー」

隣でいきなり黒猫が鳴き声を上げた。

貴志はその様子を見て、そう言えども、と思に出したことを口に出した。

「あの、この猫って…やっぱり普通の猫じゃないんですか？」

ケット・シー

一条家の使い魔

確かそんなことを言われた気がするが、喋るのだからやはり普通ではないのだろう。

「え？ そうだね。精霊とか言われているけど、実際は悪魔だよ。まあ、使い魔だから祓つたりする必要はないけれどね」

笹川が言いにくそうにそう説明した。

その黒猫を見つめながら。

「まったく、やんなっちゃうわ。下等悪魔たちとあたしと一緒にしないで欲しいわね」

黒猫がそう言つてからそっぽを向いた。

笹川はその様子を見て、

「あ、怒らせちゃったかな。上級のケット・シーはプライドも高いからね。一条家の使い魔ともなれば、超一流だし」

「あら、よく分かってるじゃない」

黒猫は一気に身を翻して、いかにも偉そうに笹川を見据えた。

「この猫、一条家の使い魔つてことは…」

「そ、君の使い魔つてことになるかな。今現在、一條家の当主の席は空いているから。多分そのうち君の所に一條家の使いが行くと思つよ」

貴志は黒猫をまじまじと見つめて、改めてこの黒猫との出会いが運命的であったと感じた。

この猫と会わなければ貴志は西田とも会えなかつたし、この猫が居なければ一条更紗の息子だとも気付かれなかつた。たとえば今までの話が本当のことならば、これは運命的な偶然の出会いである。

「まあ、上級悪魔と言つても人のコミュニケーションは取れないから？ 結局は使えないんだけどね」

笹川が最大級の憎たらしさでその言葉を吐いた。同時に黒猫はキシャーッと全身の毛を逆立てて「なんですってえー？」と笹川に敵意むき出しの臨戦態勢に入った。

貴志は黒猫をなだめるように撫でながら、 笹川に向かつて言つた。
「コミュニケーション取れないって、ちゃんと話すじゃないですか」
 笹川は一瞬呆気に取られた顔をしたが、すぐに何か思い当つたようすでにつりりと笑い、

「まあ、ニヤーニヤー鳴いてはいるけどもね。人と話せなきゃ意味ないじゃないか」

一条君も面白いこと言つねー、などと言つてゐる。

しかし貴志はその言葉に絶句した。

だつて貴志には聞こえてゐるのだから。

「あら、あたし言わなかつたかしら？」

隣の黒猫があつけらかんと、そう言つた。

貴志はその事実に笹川の方をかえりみるが、その顔は平然として

「どつたの？」などと軽口を叩いている。

「えつ、あつとその……言葉、喋りますよね？ コイツ、ちゃんとした人間の……」

ぽかーんと空いた笹川の口に、貴志は嵐の予感だった。

* * * *

「とりあえず、君の寮あつちだから。うん、行けば分かること思つ。荷物は既に搬入済みだし」

半ば魂が抜けた状態の笹川が、そう言つて校舎から貴志を見送つた。

貴志の「黒猫の声が聞こえる」と言つ話は、笹川にとてつもなく大きなショックを与えたようだ。

だが、そのことを考えていても「俺が変なのか」「まさか幻聴」と言つ思考が頭の中をぐるぐるするだけだったので、とりあえず言われた寮に行つてみることにした。

夜間科は全寮制なんだと、朝の話には聞いていた。
だが荷物は既に搬入済みだ、と言つ葉はずつと貴志は引っかかるつていた。

何故なら貴志はこの寮に入る予定は無かつたのだ。当然荷物の整理などもしていない。

だが、そんなこと心配無用だった。

貴志が校舎と同じく洋館のような寮に着いた時、そこには西田がいて、

「貴方の荷物、お宅から全て搬入させて頂きました。無論あのアパートは引き払つておきましたから」
にこっと微笑みながら平然と言つてのけたのだ。

お宅から全て搬入。

と言つことは不法侵入では無いのだろうか?しかもアパートを引き払つてきたとなるとよもや犯罪ではないか?いや不法侵入も犯罪だけれども。

貴志が何も言えずに突つ立つていると、横から黒猫がすり寄つて来た。

「何か大事な思い出でもあったの?そのアパートに

別段無かつた。だから黒猫にも「別に」と答え、足早に寮の建物の中へと入った。

Scene - 5 大叔父さん

『行つてきます』

母が亡くなつたあの日の朝は、いつもと変わらない、日常的な朝だった。

その日貴志は、いつものように朝食を作り、母とそれを食べ、母を見送つた。

お母さんが亡くなりました。

貴志がその連絡を受け、指定された場所に赴いた時は、既に母は棺桶の中だった。母の同僚と言つ人曰く、「交通事故だった。会社の方で既に葬儀の準備は出来ている」ということだった。

それが何だ。母の顔をもう一度見せてくれ。

それは叶わなかつた。断固として会社の人たちは認めず、母の棺桶が開かれるることは無かつた。

* * * * *

貴志は、無駄に広い寮の部屋でベッドに腰掛けながら一人、あれこれと考えていた。いや、厳密に言えばこの部屋にはもう一匹、黒い猫がいるのだが、一人で猫に話しかけるといつのも妙な気分なので放つておいた。

こんこん、と、突然部屋の玄関扉が叩かれた。

「どちら様ですか？」

貴志はベッドに腰掛けたまま言つたが、扉の外から返事は帰つてこなかつた。

貴志は仕方なく、少し怪しがりながらも立ち上がり、扉を開けた。

「こんばんわ、貴志君」

そこにはグレーのスーツに身を包み、白い猫を抱いている三十歳くらいの男が立っていた。

男は白い猫を撫でながら、貴志をじっと見つめていた。居心地悪く貴志が身じろぎすると、男はクスリと笑いながら言った。

「ああ、やはり。君は更紗の息子のようですね」

細められた紫色の瞳が 人間ではなさそうな色だが
められ、その唇が歪められる。

「えっと、どちら様ですか？」

見覚えのない男を前にして、貴志は一瞬ひるんだ。それくらい、男の威圧感は半端無かつた。

ひるんで後ろに下がった貴志を見て、男は仰々しそうに頭を下げた。

「どうも、初めまして。私の名前は一条力イリです」

「一条？ つてつまり……」

「はい。君の親戚、といふ」とです。正確に言えば、私は君の大**叔父に当たりますね**」

大**叔父**……といふことは祖父の兄弟といふことだが、目の前の男一条力イリは明らかに若く見える。

「えっと、失礼ですが……年齢は？」

「六十三です。ちなみに君のおじいさんも健在で、私より五つ年上の六十八歳ですよ」

どこから見ても実年齢より若く見えるが、それ以上突っ込むと厄介な説明を受けそうなので、あとで他の人に訊こう、と決めてそこはスルーした。

「あ、中入りますか？」

貴志はここでずっと部屋の外だったことに気が付いて、部屋の中に招こうとしたが、カイリはそれを丁寧に断つた。

「結構です。私は君にこれを渡しに来ただけですから」

カイリはいつの間にか手に持っていた赤い、ワインレッドの封筒を貴志に手渡して、白い猫を撫でながら去つて行つた。

去つていく後姿だけを見送った貴志には、カイリがどんな顔をしていたのか知る由もなかつた。

* * * * *

「あの子には、おかしな術がかかっていましたよ。弱まつてはいましたがね」

もう窓の外は暗く、足元すらおぼつかない部屋には、灯りもつけず二つの影があつた。一つは闇の中に紫色の瞳を、もう一つは真紅の瞳を輝かせて。

「どうせ更紗がかけた術だらう。そんなことはどうでも良いが……適性はあつたかね？」

しわがれた老人の声がそう問つた。紫の瞳は揶揄するように細められ、男が答えた。

「言つたじやないです、術がかかっていたと。適性判断はしかねますね」

「……まあ、いい。直に分かることだ。それよりも
闇の中の密談は、真夜中まで続いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1807x/>

エクソシストの資格

2011年12月20日14時47分発行